

一 北海道の山小屋



白銀荘―吹上温泉あと―

山小屋の魅力とは不思議なものである。これを一言でいうならば、はなはだ抽象的な言葉であるが、安堵感とでもいおうか。たとえ建物自体に多少の不満はあるとしても、心のやすらぎをあたえられることだけは間違いないと思う。

私が山小屋の味をおぼえたのは、できてそれほどたない「パラダイス・ヒュッテ」を訪ねたときにはじまる。そのとき受けた印象は、名状しがたい感銘であったのを記憶している。もちろん、環境もいまとはだいぶ違っていた。利用者の態度にいたっては、なおさらである。ズブの素人が山小屋の在り方を見せられ、胸を打たれたというのが本音である。それをきつかけに、手稲駅（旧・軽川駅）前のアプローチにいまも残る旧道をたどり、ここに通うのが病みつきとなった。

当時、まだ親の睦をかじっていた頃である。誰に気がねするわけでない。ただ、山を歩く楽しさと、新しく山小屋を発見するだけで心は満ち足りた。春香山の「旧・銀嶺荘」を知り、ニセコの「国鉄・山の家」に通うようになったのは、それから間もなくであった。これが私の貧しい山歴の発端であるが、やがて山歩きも人目をばはからねばならぬ、あのいやな時代を迎え、数年のプランクができたことは私の場合も例外

ではない。

そして戦後、縁あって道・林務部に厄介になったおかげで、ふたたび山と結びついたらばかりではない。思ってもみなかった山小屋の建設にたずさわる機会も得たし、またその直営管理のむずかしさを身につまされて教えられもした。この間十数年、公私の足跡をふくめて道内の目ぼしい山小屋のほとんどを知ることができた。したがって一般利用者とはいくぶん違った角度から、山小屋なるものを見方を身につけたかと思われる。その一端をのべてみよう。

山気違いにも、好きな山と嫌いな山があるように、山小屋にもそれがある。環境や利用価値はさておくとして、建築様式であるとか意匠などの趣味的な要素もたぶんにあるだろうが、管理人の人柄、これが山小屋の魅力を大きく左右することを見のがせないと思う。それは、山の良き相談相手であるとともに、いざというとき役に立つひとでなければならぬ。この「山」と「山小屋」と「人」が一体となった例は、まことに少なかつた。現在とて、同じである。自分の経験から例をあげるなら、かつての吹上温泉跡の「白銀荘」と、現在にいたるユウマンベツの「白雲荘」の二つがあるだけである。

ところでいま、北海道に山小屋はどのくらいあるだろうか。日本山岳会「山日記」の今年度版によると、その数四十六。北海道出版社の「山と旅」終刊号によると、五十六となっている。このくい違いは、今日の山小屋というものの内容が、きわめてあいまいになったことに起因するとみるべきだろう。いい代えるならば、管理人もいなし避難小屋から山小屋風の簡易宿舎にいたるまでの、どこに線を引くかによって起る開きである。と同時にこの混乱は、登山者とハイカー、いな、山とは全く無縁の者までが同居する今日の山小屋を、如実にの語るともいえる。

では、われわれのいう山小屋とはどう規制すればよいか。かつては標高の高さが条件の一つであった。だが、今日では千メートルを越えたところに、デラックスな旅館もできている。山麓の集落地帯には、形だけ山小屋の宿舎が急激に増しつつある現況である。とすれば、避難小屋をふくめて、自炊（兼泊り）をたてまえとする小屋と解するのが正しいようだ。

もともと北海道の山小屋は、官庁や大学鉄道などの施設であって、料金こそ安いがいささかサービスピ精神の欠けるきらいがあった。われわれは、山とはそういうものという割り切っていたし、本州の一部にあるよう

なあくどい営利小屋にくらべると、むしろありがたいときえ感じていた。といって、いわゆる北海道の「泊めてやる」式のニュアンスのある扱い方に、疑問がなかったというわけではない。

一方、利用者側である。不必要に管理人を刺激する言葉を弄し、態度も粗雑なのをしばしば見かけるこのごろである。俗にいう「売り言葉に買い言葉」なくともすむ摩擦の原因の多くはここにもあると思う。いまは、シャベリ得、ゴネ得のまかり通る時代である。これを山にまで持ちこまれるのを見るにつけ、口にしたくない言葉であるが、古き良き時代が脳裏に浮かぶ。こういう人間同士のあつれきに触れるのは、この稿の目的ではない。だが、つぎの実例とながち無関係でもないと思うので、心ならずも引き合いに出したまでである。

昭和二十九年の国休のとき、道・林務部が建てた「白雲岳・避難小屋」の破損が余りにも激しく、補修の対策に悩まされたことがあった。調べてみると、表扉の鍵もかけずに立ち去るための風害によるものと判った。この小屋の位置からいって、利用者のレベルを相当に高く買っていたのを見事に裏切られたケースである。また、こんな例もある。

四、五年前であったと思う。時季はゴ

ルデン・ウィーク。「黒岳・石室」の羽目板を剥がして焚いたうえ、屋内に脱糞した一団があったという。扉口の一部が真新しく張り替えられていたのを不審に思い、居合わせた管理人に聴いたところが以上の始末である。これまでも公共物をゆえなく破損する幾多の例を見、聴きしているが、これほど悪質なものはなかったと思う。

前者は、山小屋の使い方も知らなかったために起きた被害だけに、まだいくらか救われるところがあるともいえる。が、後者の場合は、情状酌量する余地の全くない行為である。非常識もここまでくると、愚劣な遭難事故と同様、もはや「登山以前」の問題として考えなければならぬようだ。

無謀な車道計画もその一つである。このほうは一步誤ると、環境もろとも風致を破壊するだけに、個人の犯行よりさらに始末が悪い。山小屋の位置というものは、さまざまな条件を基礎として選ばれた貴重な「点」である。これを無視した車道の延長がどのようなものか、われわれはその実例を見るのに不自由はしない。単に美観一つをとりあげてみるだけでも判るはずだ。あえて名は伏せるが、山小屋変じて「バス停」となり、「共同便所」となり果てた哀れな姿である。

仮りに、である。古くなった山小屋だか

らという考え方で、車道が優先するのであるならば、現在の山小屋分布図と過去のそれをくらべたことがあるかと、お聴きしてみたい。また、すでに失われた山小屋に対する対策についても、同じことがいえる。

いま私の手元に、昭和十年発行の「札幌附近のスキーコース図」(北大スキー部編集)が残っている。これによると、山小屋の数は十六。このうち、一般には開放しなかった北大の「朝白寮」をはじめ、「東日ヒュッテ」「奥無意根小屋」「右股小屋」「左股小屋」「長門ヒュッテ」「朝里ヒュッテ」が姿を消し、これに代わるものがない。まだにできていない状態である。

北海道に、アルピニズムと結びついた山小屋が誕生して四十年。この間、幾多の消長を経た結果が、以上のべたような現況である。一口にいって、行動半径の短くなつた今日の傾向からいえば、あるいはこれでは不足はないのかも知れない。だが、山小屋というものの正しい在り方からみると、位置といい、性格といい、質的な低下を認めないわけにはいかない。とすれば、せめて現存するものをあらゆる意味で大切にしたいというのが、私のねがいである。

(北海道山岳写真連盟・副会長)



白雲荘—ユコマンベツ